



学

藝

令和8年(2026年)3月/第156号

— 特集：新年祝賀会 —



若草もゆる



保健体育科関係の皆様

◇ 巻頭言 理事長あいさつ	理事長 茅原 直樹	2
豊かな学びにつながる学習評価へ	副理事長 渡辺 裕之	3
◇ 新年祝賀会挨拶	理事長 茅原 直樹	3
◇ 新年祝賀会の様子		4
◇ 支部紹介 文京支部・台東支部・荒川支部・江戸川支部・東大和支部・多摩支部・八丈支部・附属学校支部		8
◇ 研究発表会報告 品川区立伊藤学園 中野区立かみさぎ幼稚園		12
東村山市立化成小学校 日野市立仲田小学校		14
◇ 副校長の活躍 墨田区立両国小学校 武蔵野市立第五小学校		16
◇ 若手教員の活躍 渋谷区立神南小学校 小金井市立本町小学校		17
◇ 本部だより	総務部・会計部・研修部・調査部・広報部・お知らせ	18
◇ 新年祝賀会～各支部等記念写真～		20



「これからの同窓会の活性化を期待します」

理事長 茅 原 直 樹

さる一月二十五日開催の新年祝賀会につきましては、東京学芸大学副学長佐々木幸寿様をはじめとする来賓の方々御臨席の下、百四十名の皆様による和やかで楽しい集いとなりました。これもひとえにご参加いただいた皆様、準備にあたっていただいた総務部をはじめ関係各部の皆様、参加の呼びかけにご尽力いただいた各支部長の皆様のお力によるものと存じ、誌面をもって改めて御礼申し上げます。祝賀会当日は、各支部の皆様が、会場のそこかしこで学生時代の思い出に花を咲かせていらつしやる姿、今般の教育施策について支部や校種を越えて語らう姿を目にし、本会のもつ同窓の絆をつなぐ役割を果たせたことを改めて実感し、本當にうれしく思いました。さて、現在、本会は二千三百有余名の会員の皆様によって成り立っております。そして、皆様からお預かりする会費を財源として活動を継続させていただいています。しかしながら、支部長先生方からは、「一般の先生方にもぜひ集まってもらいいたいが、なかなか声をかける機会がない。」「他校の新しい先生が同窓生かどうか、個人情報保護の観点もあって、なかなか把握しづらい。」などのお声を頂戴しています。さらには、会費徴収事務については、各支部の会計担当の先生方にご負担をおかけしていることを申し訳なく思っています。こうした負担の軽減を図るため、会員登録の方法、会費徴収事務のシステム化等について各支部のお声も伺いながら早急に検討してまいりたいと考えております。

ところで、新年祝賀会に先立つ昨年十二月六日、東京学芸大学硬式野球部OB会小金井倶楽部発足五十周年記念祝賀会にお招きいただき、同窓会を代表してご挨拶をさせていただきました。

当日、会場には、会員の皆様をはじめ各界で活躍されている野球部OBの皆様はもちろん、現役の野球部員の諸君も大勢参加していました。学芸大学野球部OBといえば、すぐに思い出されるのが、前回のWBC監督として代表チームを世界一に導き、野球殿堂入りも果たされた栗山英樹氏ですが、その栗山氏も北海道からお見えになっていました。栗山氏は、会場でも現役の学生を集めて盛んにお声をかけておられました。その姿は、「監督」というより、やはり「先生」でした。殿堂入りの理由が「指導者」としての実績によるといっても頷けます。

栗山氏より一学年上の私は、野球部員ではありませんでしたが、当時の野球部は、東京新大野球連盟の強豪（もちろん今も強豪ですが）で、全日本大学野球選手権連続出場を果たしたことはよく知っていました。当時の野球部は、東京新大野球連盟の強豪（もちろん今も強豪ですが）いいのが入ってきたぞ。」と、野球部員だった国語科の先輩から聞かされ、「栗山」が私の母の旧姓だったこともあって強く印象に残りました。拙稿執筆中の三月上旬は、WBC開幕直前で、改めて前回の世界一が脚光を浴びていました。先日、テレビで拝見した栗山氏と某女性キャスターとの対談では、「黒板にチョーク」の方が落ち着くということ、選手・スポーツキャスター・監督というご自分の歩まれた各時代に学んだことについて、キーワードを板書しながら語られていました。その中で監督時代に学んだこととして、「正しいということはない」とお書きになりました。どういうことなのだろうと思っていると、「翔平の二刀流を認めたことが正しかったかどうかかわからない。むしろ、どちらか一方でやらせたら六十歳過ぎて一流として続けられるような別の意味のスーパースターになるかもしれない。例えば、投手を十年続けたあとに野手に転向させるなど、投手と打者の時期を分けてそれぞれに集中させた方がとてもない記録を打ち立てられるかもしれない。二刀流に決めさせたことが正しいかどうかそれは、本當は分からない。だからこそ、本人の思いを十分に聞き取って、どうするかは自分で決めさせる。」そんなこともおっしゃっていました。また、二十一年の長い「キャスター時代」のあと、コーチなどの経験が一度もないまま二〇一二年、日本ハムの監督に就任。いきなりリーグ優勝。そして翌年は最下位。二〇一六年リーグ優勝から日本シリーズ優勝。その翌年はリーグ五位。十年間の日本ハム監督からすぐに日本代表監督となり二年間でチームをまとめ、二〇二三WBC優勝へと導きます。その間、優れた若手を次々に育成されました。どんな選手も区別なく名前呼び、個性をうまく引き出す。それはもしかすると母校での学びが関係していたのかもしれない。そういう栗山氏が言うとき「正しいということはない。」という言葉は、教育に携わる私たちにとって重みを増すように思います。

拙稿が皆様の目を汚す頃、今回のWBCの結果も出ていでしょうが、たとえどんな結果でも栗山氏の偉業が色あせることはありません。栗山氏をはじめ各界で活躍される同窓の皆様ともさらに親睦が深められるよう、辞雍会との関係強化についても力を入れてまいります。

豊かな学びにつながる学習評価へ

副理事長 渡 辺 裕 之

昨年九月、中教審教育課程企画特別部会より「論点整理」が公開され、次期学習指導要領改定に向けた方向性が示されました。学校現場では、内容を十分に吟味し、未来を生きる子供たちの望ましい姿の実現に向けて、準備を進めることとなります。学校運営にあたっては、論点整理を踏まえ、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させることに注力し、これまでの『成績主義』や『同調圧力』への偏重から脱却することを目指さなければなりません。

一 観点別評価の変更点に注視

今回、新たな観点別評価のイメージとして、「学びに向かう力、人間性等」を目標に準拠した評価から個人内評価として、評定に馴染まないことが示されました。これにより、評定の対象は、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の2観点のみとなり、「学びに向かう力、人間性等」は目標に準拠した評価を行わず、個人内評価として、所見に反映することになります。一方で、「学びに向かう力、人間性等」の評価は、評定の柱となる2観点をどのように働かせるかを決定付ける重要な要素であるとの指摘があり、今後の評定の考え方を再考する上での核心部分と言えそうです。

二 評価の意義の追求を

現行の「学びに向かう力、人間性等」の学習評価の観点として、「主体的に学習に取り組む態度」が設定され

ていましたが、事後に「学びの自己調整」や「粘り強さ」として整理されたことが影響し、目指す資質・能力を適切に反映した評価になりにくかったという指摘がありました。さらには、児童・生徒が、教師の期待に沿う学び方を過度に意識し、勤勉さのアピールやノート提出の頻度を増やすなど、『学びに向かう力、人間性等の本質』とは乖離した実態も散見されてきました。

今後、「学びに向かう力、人間性等」が評定に直結しなくなるため、このような『評価のための学習』からの脱却が図られ、真に「学びの自己調整」や「粘り強さ」が発揮されやすい環境が整うことが期待されます。

三 豊かな学びにつながるために

論点整理では、「学びに向かう力、人間性等」の評価の構造化に向け、①初発の思考や行動を起こす力・好奇心 ②他者との対話や協働 ③学びの主体的な調整 ④学びを方向付ける人間性 として、四つの要素を「整理イメージ」として図示しています。イメージ図には4つの要素を往還させながら、「変化が激しい不確実な社会の中で、学びを通じて自分の人生を舵取りし、社会の中で多様な他者とともに生きる力を育む」とあります。

これらのことを踏まえ、子供たちの学びに向かう力、人間性の高まりを目指し、豊かな学びにつながる学習評価の在り方について、学校が主体となって改革することが求められています。

新年祝賀会挨拶

理事長 茅 原 直 樹

新年あけましておめでとうございます。理事長を務めさせていただいております。理事長を務めさせていただきます。茅原直樹でございます。

本日は、東京学芸大学副学長 佐々木幸寿様をはじめ多くの来賓の皆様をお迎えして、令和八年新年祝賀会を開催できますことに心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

先行きが見えない時代ですが、社会がどのように揺れ動くかと、国の内外を問わず、すべての子ども達の幸せのために、予測不能の世の中にあっても明るい未来を信じて「自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手」の育成のために力を合わせて新しい挑戦に最高の年にすべく、進んでまいりたいと存じます。

ところで、先週からの大寒波で日本海側を中心に大変な状況になっている地域もあるようです。ちょうど受験シーズンですから、すべての受験生が、よりよいコンディションで実力を発揮できることを願うばかりです。

明日二十六日は、都立高校の推薦選抜がございます。高校の先生方には、その対応でお忙しい、この会への参加がかなわなかったという方もいらっしゃるかと伺っております。受験生を送り出す側、受け入れる側、それぞれの学校の先生方には、どうか子どもたちのために万全を期すようよろしくお願いいたします。

来年度に目を転じますと、令和八年度当初予算には、これまでにない大き

な学校教育関連予算が盛り込まれています。主な三つを挙げますと、「小学校給食費の無償化」、「中学校三十五人学級の導入」、「高校授業料の無償化」です。

しかし、この度の衆議院解散で、下手をすると、年度当初に実現できるかどうか、心配な状況になってきました。さらに、今年の教員採用選考ですが、全国全校種の平均で二・九倍と初めて三倍を割り込みました。小学校は深刻で、二倍を割り込みました。特に九州は軒並み低く、宮崎と佐賀では、〇・九倍と、辞退者が出る前から既に教員不足が明白になってしまいました。

このような状況下、会員の皆様には、首都東京の教員養成を担う母校東京学芸大学と力を合わせて「通いたい・通わせたい・働きたい」と「子ども・保護者・教職員」が思えるような魅力ある学校づくりを進めていただきたい、と考えております。

本日のこの会が、会員の皆様の旧交を温めるとともに、子どもたちの未来のために語り合う場となれば幸いです。

長くなりましたが、結びにこの会のためにご尽力をいただきました総務部をはじめ、各部の部員の皆様、そして、各支部の支部長先生、東京ガーターパレスのスタッフの皆様に感謝を申し上げます。あいさつに代えさせていただきます。

どうもありがとうございました。

令和8年

新年祝賀会

日時 令和8年1月25日（日）12時～

場所 東京ガーデンパレス



一般社団法人 東京学芸大学同窓会

式次第

1. 開会のことば
2. 理事長あいさつ
3. 来賓挨拶
4. 来賓紹介
5. 乾杯
6. 会食・懇談
7. 情報交換
8. 閉会のことば

新年祝賀会の様子

当日は、140名の参加がありました。そのうち、79名が各支部からの参加者でした。今年から参加者の人数制限をなくしたので、各支部からの参加者が増えました。各支部からの報告、支部ごとの記念撮影、旧交を温める姿があちらこちらで見られ、会場は笑顔でいっぱいになりました。来年はさらに盛大に開催したいと思います。



受付



会場入口



茅原理事長 あいさつ



開式のことば



来賓紹介



佐々木副学長 あいさつ（代読）



乾杯



会食と懇談

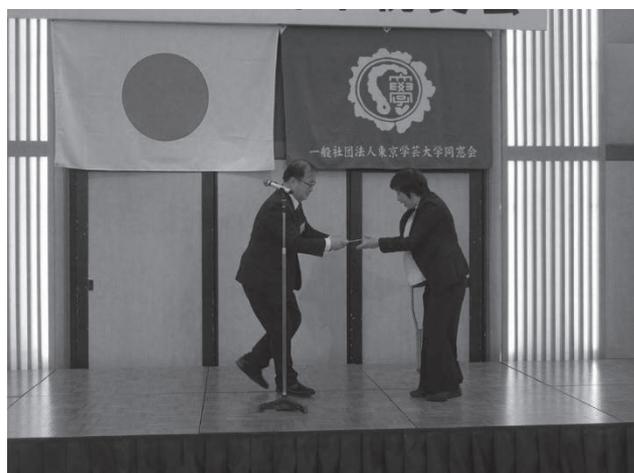


お楽しみ表彰

お楽しみ表彰が復活しました。参加者の多い支部などが表彰されました。



第1位 練馬区 11人



第2位 江戸川区 10人



第3位 北区 9人



第3位 杉並区 9人



閉式のことば



辟雍会の皆様

文京区の紹介

文京支部長 津島 弘和

(文京区立林町小学校)

「東大よりも芸があり、芸大よりも学がある。」旧友の言葉で耳にしたことのある言葉です。半ば冗談めいた言い方で、学問だけでもなく、技だけでもない、教育という営みの面白さを言い表した言葉だったように思います。同時に、教師を志す者としての気位を感じさせる言葉だったと思っと思っています。その頃どこか遠く感じていた東京大学のある文京区であるというのは、不思議な縁のようにも感じるところです。

文京区は「文(ふみ)の京(みやこ)」とも呼ばれ、古くから学問と文化の香りが漂う地域です。東京大学があるだけでなく、他にも多くの大学や研究機関があります。また、夏目漱石や森鷗外などの文学者が暮らしたこともあり、歩いていると学問や文化の歴史が静かに積み重なっていることをひしひしと感じます。

文京区では、地域の方々の教育に対する関心の高さを強く感じます。また、行事や地域活動の場では、子どもたちを温かく見守ってくださります。学校はやはり地域の中にあつてこそ成り立つものだということを改めて実感させ

られます。

私の勤務する林町小学校では、今年度からコミュニティ・スクールとしての歩みが始まりました。現在、手探りで進んでいる段階ですが、地域の方々と学校が、共に学校の在り方を考える場を作れたことに、大きな手ごたえを感じています。

文京区では「個が輝き 共に生きる 文京の教育」という教育ビジョンのもと、一人一人のよさや可能性を大切にしながら、地域とともに子どもたちを育てていく教育が進められています。学校と地域が互いの力を生かしながら子どもたちを育てていく、そのような教育の姿が、文京区の大きな特徴です。



CSで検討した「朝活！(始業前の運動機会の時間)」の様子(林町小)

台東区の紹介

台東支部長 柏井 啓史

(台東区立富士小学校)

【台東区の様子】

台東区は東京区部のほぼ中央に位置し、上野・浅草といった観光拠点を中心に、国内外から多くの観光客が訪れています。上野地区には世界遺産の西洋美術館を始め、美術館、博物館、上野動物園と文化施設が集まり、浅草寺を中心とした浅草地区には江戸の文化や下町情緒が色濃く残っています。また、数々のお祭り、隅田川花火大会、朝顔市や西の市と四季折々の行事もたくさんあり、賑わいの絶えない町です。平成三十年には台東区基本構想が策定され、『世界に輝く ひと まち たいとう』の実現を目指して、すべての人々の人権が尊重され、多様な人々が活躍できる地域社会の構築を目指しています。

【台東区の教育・学校園】

台東区には区立幼稚園・こども園十一園、小学校十九校、中学校七校があります。年二回の「連携の日」には、中学校区ごとの「ファミリー」で集まり、私立幼稚園や保育園も含めた幼児教育施設から中学校までの保育士・教員がお互いに保育や授業を参観し、よりよい連携に向けて話し合っています。

【学びのキャンパスプランニング事業】
台東区の豊かな伝統文化、人材を生

かした教育を推進しようと、施策の一つとして、平成二十五年度より「学びのキャンパスプランニング事業」を行っています。この事業は台東区全体を学びの場と捉え、教育委員会が区内の文化・芸術・歴史施設や企業、団体などと連携した教育プログラムを企画し、学校園の希望により実施するものです。

大学と連携したアニメーション表現、凧作り、能体験、お囃子体験、音楽ワークショップなど、様々な体験・学習が準備され、子供たちは目を輝かせて取り組み、その後の遊びや学びに生かす姿が見られます。本物に触れる貴重な機会であり、文化財や人材に恵まれている台東区ならではのよさを感じています。



地域のお茶の先生による茶道教室

荒川区の紹介

荒川支部長 宮原典子

(荒川区立第四峡田小学校)

「荒川区には、区立幼稚園・子ども園六園、区立小学校二十四校、中学校十校があります。本年度の支部の会員は五十八名、管理職は十二人です。

荒川区では、今年度より小中学校の給食費完全無償化を開始しました。さらに、教材費保護者負担軽減事業も実施し一律購入品は全て公費扱い、宿泊行事や校外学習費用も全額公費扱いとなり、子育て世代家庭を手厚くサポートしています。また、全校舎建て替え計画も発表されました。

未来を拓きたくましく生きる子どもを育てるため、「荒川区学校教育ビジョン」の下、教育活動を展開しています。

学校司書の全校常駐や学校図書館支援室の設置など学校図書館教育の充実が注目を集めており、日本各地の教育委員会から視察を受けたり、新聞各紙やテレビ番組でも紹介されたりしています。平成三十年に「読書を愛するまち・あらかわ」が宣言され、区立図書館の充実とともに、「まちなか図書館」設置推進により、児童生徒のみならず、区民へ広く読書推進を図っています。

英語教育推進も長い荒川区ですが、世界でも有名な魅力などを紹介します。世界でも有名な宿泊施設紹介サイトに掲載された「二〇二五年夏の旅行動

向レポート」として「味覚の穴場」世界ランキング十都市の一つとして、日本で唯一荒川区が掲載されました。下町情緒あふれる区民の方々が長年守ってきた味や文化が認められたのです。

また、ワールドベースボールクラシック出場、メジャーリーガー大谷翔平選手と共に大活躍、努力家で仲間と明るく過ごす鈴木誠也選手は、荒川区町屋出身です。さらに、女優で読書家、慶応大学在籍の芦田愛菜さんも荒川区で小学生時代を過ごし成長しました。海外旅行者で賑わう日暮里の繊維街も注目的です。これからも世界へ羽ばたく児童生徒を育成すべく、荒川区の各学校は教育活動に邁進いたします。今後も荒川区にご注目ください。



荒川区役所内「応援横断幕」
～荒川区から世界へ～

江戸川区の紹介

江戸川支部長 山本浩一

(江戸川区立下鎌田東小学校)

江戸川区は人口約六十九万人で、二十三区において人口数第五位に位置する大きな区です。土地の特徴としては、南北に大きな川が四本流れる水と緑の溢れるまちです。北の小岩地区、中央の松江地区などは、比較的地域の歴史が古く、下町風情がある一方、南

の葛西地区は交通の利便性が生かされた高層住宅が立ち並ぶ新しい街へと発展しています。産業の特徴は、中小の製造業が集まるものづくりのまちであり、江戸川区特産の小松菜や金魚の養殖、伝統工芸品の江戸風鈴や江戸硝子も有名です。

近年では、江戸川区名誉区民でもある童話作家角野栄子氏が館長を務める「魔法の文学館」が開館したり、リーグワンのクボタスピアーズ船橋・東京ベイがホームスタジアムとしてスピアーズえどりくフィールド(江戸川区陸上競技場)を利用したりするなど、文化やスポーツの発展にも寄与しており、子供たちは多様な経験をとおして心豊かに成長しています。

現在江戸川区には、区立幼稚園一園、小学校六十五校、中学校三十二校があり、約四万五千人の児童生徒が学んで



魔法の文学館での
社会科見学の様子

東大和市の紹介

東大和支部長 溝口佳江

(東大和市立第九小学校)

東大和市は、東京都の東西のほぼ中央に位置し、北は埼玉県に接していて、狭山丘陵や多摩湖があります。南には玉川上水や野火止用水が流れていて、自然豊かな市です。市の目指す将来都市像を「水と緑と笑顔が輝くまち 東大和」とし、市民が生き生きと活動する、活力あるまちづくり、持続可能なまちづくりを進めています。

本市は、小学校十校、中学校五校の小規模な地区です。小中合わせて十五校で、五つの中学校区ごとの小中連携や交流が盛んです。

また、十五校全てが、コミュニティ・スクールです。地域とともにある学校として、地域とのつながりを大切にしながら、社会総がかりで子供たちの健全育成や学校運営の改革に取り組んでいます。

東大和市では、市の教育委員会の活動方針及び最重要課題である「子供たち一人一人のウェルビーイングが家庭や地域等に広がる学びの充実」の実現に向けて、教育活動を進めています。各小・中学校が、自校の特色を生かして様々な取組を創意工夫し、実施しています。私の学校では、ウェルビーイング向上に向けて、「和」を尊び、様々な日本文化体験に取り組んでおりま

す。

また、本市では、「令和七年度 教育の日 東やまと」と設定した日に、今年度の教育課題指定校（三校）の研究発表会を実施しました。小学校二校、中学校一校です。その三校は、「クラス会議（話し合い活動）」「クラス総合（自律的学習）」「個別最適な学び（デジタルの活用）」について、実践的研究をしてきたことを、市内全教員にむけて発表しました。どの発表も、本市の教育の発展につながる充実した内容でした。

これからも、市内全校で、児童・生徒、家庭、地域、教職員等、教育に関わる全ての人のウェルビーイングの向上を目指してまいります。



ウェルビーイング向上に向けて
箏曲教室（日本文化体験）の様子

多摩市の紹介

多摩支部長 水野裕司

(多摩市立愛和小学校)

多摩市内には小学校十七校、中学校九校があり、小学生は約六千五百人、中学生は約三千人が在籍しています。小中学校二十六校全校がユネスコスクールに加盟し、地域や学校の特色を生かした教育活動を展開しています。

多摩市では平成二十一年度から「2050年の大人づくり」をスローガンにESD（持続可能な開発のための教育）を推進し、平成二十七年からは子どもたちのESDの取組の成果発表と市政や市民へのメッセージを考え発表する「多摩市子どもみらい会議（以後、未来会議）を開催しており、今年度で十一年目となりました。今年度は、三つの中学校区の小・中学校が集まり、「2050年の多摩市のために私たちにできること」をテーマに、各学校のESDの取組から学んだことを基にして持続可能なまちづくりに向けた提言とメッセージの発信を行いました。

第一部では、各学校がESDの取組の成果を発表し、第二部で中学校区ごとに協議・意見交換・提言の検討を行いました。話し合いには、多摩市役所の関係する部署の職員が加わり、市の情報を伝えながら助言をしました。

第三部では参加した全児童・生徒で

市政への提言を協議、作成し、第四部で市政への提言「今を大切に 全員がじぶんらしく生きられる環境を作ろう」を発表し、気象予報士、防災士でアナウンサーの大内孝子さんから御意見をいただきました。

更に今年度からは、未来会議に参加しない中学校区の児童・生徒に発信と交流の場を設けています。実施方法は、中学校区ごとに任されており、オンラインや参集など様々な形式ですが、市内全ての小中学校が参加します。

このように各校特色を生かした取組とその交流を積み重ねる中で、子供たち自身が自分たちの住む街を大切に思い、持続可能な世界の実現に向けて考える力が育っています。



和紙の繊維で作った雑巾を使って清掃し、その雑巾を畑に散布し、土に還してジャガイモを育てています。

八丈・青ヶ島支部の紹介

一 支部内小・中学校の歩み

八丈町の小学校の歴史は、明治初期の開校から始まっており百五十年の歴史のある伝統校であるが、地域の少子化に伴う再編を経て、現在は三校で運営されている。中学校は、学制改革（六・三制）の実施により、四校が誕生したが、小学校と同様に再編を経て現在は三校である。青ヶ島村には青ヶ島小・中学校がある。学大同窓生は、管理職は一名に留まるが、主幹教諭・主任教諭等が各校で活躍している。また、終身会員の方との連携を図りながら、教育活動を進めている。

二 保・小・中・高・特の連携

小学校と中学校の学区域が同一である利点を生かし、平成三十年四月からは、義務教育九年間を通して「自分の力でたくましく生き抜く子」の育成を目指し、小・中一貫型教育を行っている。島内にある都立八丈高等学校では、課題追究学習の「八文学」の授業が行われ、カリキュラム・マネジメントの運用を図りつつ、保育園から高等学校までを見据えた連携教育を充実させている。また、島しょ地区で唯一の都立青島特別支援学校八丈分教室が令和三年度に開設され、特別支援教育の連携も強化してきている。その中で、学大生としての専門性も発揮されている。

三 島ならではの取組

日本語の最も古い特徴（奈良時代な

八丈・青ヶ島支部長 川 畑 伊豆海

(八丈町立三根小学校長)

どの古語)を残す非常に貴重な言語八丈方言(島ことば)は、八丈島と青ヶ島で話されている。平成二十一年にユネスコにより消滅危機言語の「危険」に分類されたことで、現在は教育活動に位置付けて、継承活動が行われている。

四 台風被害からの復旧・復興

昨年十月に相次いで襲来した台風二十二号二十三号による島への被害は、予想をはるかに超え、学校施設への被害も大きかった。現在も復旧作業が行われているが、多くの皆様のご協力・ご尽力のお陰で、教育活動はわずか五日間の臨時休校で再開することができた。日常の教育活動を行うことができることに感謝する日々である。また、「島の宝」である子供たちが、町を元気にしていることを改めて認識した。島の独自性を紡ぎながら、地域に根ざした教育の更なる充実に力を注ぎたい。



三根小学校の2階のオープンスペースから撮影した1枚。芝生の広い校庭で遊ぶ児童・神止山・遠くに広がる水平線

附属学校支部の紹介

学大同窓の多くの方は、学生時代にどこかの附属学校で教育実習を経験されたことと存じます。附属学校共通の目的や各地区の特色等を紹介いたします。附属学校の使命(目的・役割)は四つ。

- ①学部・大学院と連携した実験・実証校の役割。
- ②教育実習校の役割。
- ③普通教育を行う公教育の役割。
- ④地域学校と連携して教育・研究を推進する地域貢献の役割です。

幼稚園から高校まで十一の附属校(十二の校・園舎)が設置され、合わせて約五千四百人の園児・児童・生徒が在籍しています。普通教育を施すとともに、大学と連携して実証的・実践的研究に取り組むことで、

- ・協働して課題を解決する力
- ・多様性を尊重する力
- ・自己を振り返り、自己を表現する力
- ・新しい社会を創造する力

の四つの力を持った次世代の子どもを育成する教育を推進しています。また、年間約千五百人の学生を受け入れ、教育実習を行っています。

十一学校の校種別内訳は、幼稚園が一、小学校が四、中学校が三、特別支援学校が一、国際中等教育学校が一、高等学校が一で、都内の五つの地区

学芸大附属支部長 細 井 宏 一

(附属大泉小学校 副校長)

(世田谷地区、小金井地区、大泉地区、竹早地区、東久留米地区)に点在しています。それぞれ特色ある教育研究に取り組んでいます。世田谷地区は「新しいリーダー育成のための教育プログラム形成」。小金井地区は「大学と連携した教育研究のさらなる推進」。大泉地区は「国際バカロレア(IBC)教育の開発・実践・情報発信拠点」。竹早地区は「未来の学校プロジェクト」。東久留米地区は「これからの特別支援教育の開発・発信拠点」です。

附属学校は、公立校との連携を強化し、地域の教育発展に貢献したいと考えております。そこで同窓の皆様との繋がりがから広げていきたいので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。



東京学芸大学 正門
※学大HPから一部抜粋

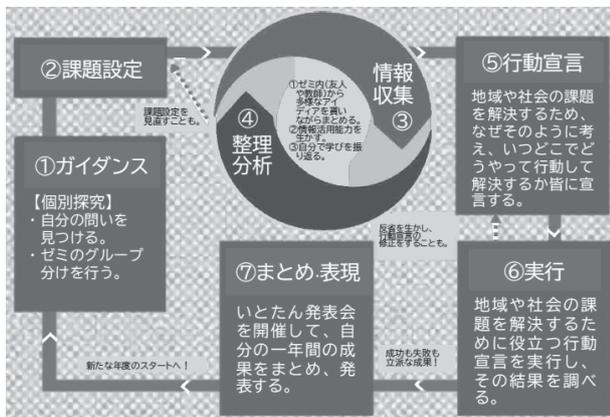
令和6・7年度東京都情報活用能力育成研究校 ・ 令和6・7年度品川区教育委員会研究学校
 研究主題 子どもの自律した深い学びの育成と教師の支援
 ～デジタル学習基盤を活用した義務教育学校における探究的な学習を通して～
 令和7年12月19日(金) 研究発表会開催 品川区立伊藤学園 統括校長 野口大和

1 はじめに

伊藤学園では、義務教育学校の9年間を見通した教育カリキュラムを生かし、探究的な学習を軸に、デジタル学習基盤を整備しながら、子どもの自律した深い学びをゴールとした研究に取り組んでいます。探究的な学習を進めながら情報活用能力を並行して育成することが重要で、発達段階に応じた9年間の情報活用能力育成計画を作成しました。また、教師は指導するのではなくファシリテーターとして学びを支援する役割に徹することにこだわり、その支援方法について実践を重ねて検証しました。

2 伊藤学探究いとたん

伊藤学園の探究活動を「いとたん」と呼んでいます。前期課程(小学校)3年生以上で区独自に年間35時間を確保している市民科一貫プランに取り組んでいます。探究サイクルは、以下のように整理しました。



社会とつながり地域に貢献する課題を個別に設定し、その課題解決のためにどのような行動をするか宣言する「行動宣言」は子どもたちの決意表明であり、発表の場を設けて他の子どもに聞いてもらいます。5～7年生、8～9年生で、似たジャンルの課題を設定した子ども同士が20人程度の異学年ゼミをつくり、相談し、アイデアをもらいながら、探究活動を進めます。5～7年では前期課程と後期課程でゼミをつくります。

3 すべてのクラスで授業公開

前期課程18クラス、後期課程12クラス、特別支援学級前期課程1クラス・後期課程1クラスのすべての学年全32学級で授業を公開しました。子どもの自律した学びの育成のために、探究的な学習を取り入れた教科の研究も進め、その授業も公開しました。

4 子どもたちが成果を発表する全体協議会

授業公開後、2年間のこれまでの学習の成果について、すべての学年・特別支援学級の子どもたちが全体協議会で参観者に説明をしました。一人1台端末や紙芝居、模造紙、模型など、発表の仕方も自分たちで工夫して選びました。説明の後には質疑応答の時間があり、参観者からの質問に懸命に答えていました。「自律した深い学び」の良かった点、重要性、必要性について、自分の考えを述べる事ができていたと思います。



公開授業後、児童が参観者に説明した

5 おわりに

この2年間の先生方の研究の成果として、52ページの「いとたんハンドブック」を作りました。教員目線で探究活動を進めるアイデア、ワークシートがぎゅっり詰まっています。試行錯誤を繰り返し、悩みも多い研究でしたが、最後まで粘り強く取り組んでくれました。そんな子どもたちと先生方は、私の誇りです。

令和6・7年度 中野区教育委員会「学校教育向上事業」研究指定園

「自分も大事 相手も大事 ともに生きる かみさぎっ子」～共感性を育む援助を探る～

令和7年10月31日(金)研究発表

中野区立かみさぎ幼稚園 園長 小池 友美

1. 主題設定の理由 ～「共感性」に着目して～

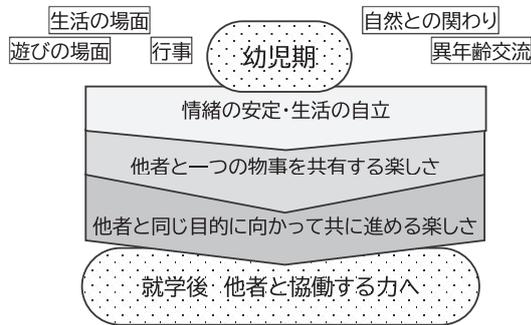
人格形成の基礎となる幼児期に、自己肯定感や自己調整力、主体性、協調性といった「非認知能力」を育てることは、幼児が様々な課題を乗り越え、よりよい人生を歩むために大切である。中でも、他者の気持ちを理解し思いやる「共感性」を高めることは、現代の多様な社会の中で生き抜く力を育むために重要であると考えられる。

今の子どもたちは、生まれたときからコロナ禍の影響を色濃く受け、大半を家庭の中で過ごしてきた。本園の幼児の実態を見ると、保護者から愛情を注がれ大切に育てられ、教師や友達へ親しみをもち自ら関わろうとする幼児が多い。一方で、家族以外の他者とコミュニケーションをとる機会の減少により、気持ちの調整や他者を思いやるのが難しい姿も見受けられる。そこで私たちは「共感性」に着目し、自分も他者も大切にできる心を育みたいと考え、本主題を設定した。

2. 研究の構想 ～幼児の共感性を、どのように育むか～

私たちが考える「共感」とは…

- <他者の立場に立って、相手がどのように感じるか想像すること>
- <自分とは異なる他者のことを理解し、違いやよさを認めること>



➡幼児の共感性は、園生活の様々な場面において、発達の段階を踏んで徐々に育まれていこう。教師がその道筋を理解して援助することが大切である。

3. 研究の内容

(1) 保育実践から ～共感性が育まれる過程の整理～

幼児が他者に関心を寄せる姿から徐々に共感性が育まれるまでの過程を整理し、表にまとめた。さらに、保育の具体的な場面を取り上げ、事例検討を積み重ねることで、共感性を育む教師の援助について探っていった。

(2) 自然との関わりから ～環境の工夫～

自然との関わりには、予測できない出会いや出来事が多く、驚きや発見、愛着、命の大切さを他者と共有しやすい。そこで本園の豊かな自然環境を生かし、幼児が自然物や生き物に心を寄せられるような環境の構成・援助を工夫した。

幼児の生活に生き物を近付けたことで、幼児が生き物に親しみや愛情をもち、自分事として捉え、行動する姿が見られるようになった。また、教師が幼児の視点に立ち、感じ、言

葉にすることで、探究心の深まりや友達との心の通い合いにつなげることができた。

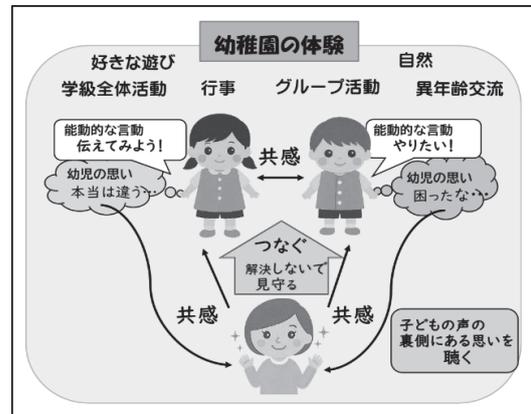
4. まとめと今後に向けて

幼児の「共感性」を育むためには、情緒の安定を基盤に3歳児から5歳児の発達の段階を踏まえ他者との心地よい関わりとともに互いの思いを知る機会を積み重ねられるようにすることが大切である。幼児同士の関係を徐々に広げながら他者と一緒に一つの物事に向かう楽しさや充実感を味わえるようにすることで、就学後の協働的な学びに向かう姿勢につながる。

<保育実践と事例検討から分かったこと>

- * 情緒の安定と生活の自立が土台となり、自分たちで生活を進めているという実感となっていく。
- * 身近な自然との関わりが、他者との共感性を引き出す。
- * 自分とは異なる他者との出会いを通して、相手の気持ちや考えへの気付きにつながる。

自分も大事 相手も大事
ともに生きる かみさぎっ子の育成を目指して



幼児の思いを読み取り、その思いを能動的に表せるように支えていく教師の姿勢が大切である。一方で、幼児に経験してほしいことが明確であればあるほど、教師の意図を伝えすぎ、幼児からの言動を引き出せないときもある。幼児の言動の裏にある思いを聴き、同じように能動的に表している幼児同士を見守りながら、「つなぎ手」として関わりをつないでいくことで、共感性を高め、自分も相手も大事にしようとする「かみさぎっ子」を育成していきたい。

5. 研究発表会

聖心女子大学名誉教授 河邊貴子先生のご講演では、当日の保育場面の写真も交え研究を価値付けていただきながら、「共感性」に焦点をあて、ともに生きる力を育む保育についてご指導いただいた。中野区内小・中学校の教員も多く参加し、幼児期から学童期への学びの連続性や連携教育の大切さについて学び合う機会となった。

令和6・7年度 東京都教育委員会 体育健康教育推進校

研究主題

誰もが安心して学び合い、自ら学びを深める児童の育成 ～体育科の授業力向上を中心とした健康教育の充実～

令和7年11月14日（金）研究発表

東村山市立化成小学校 校長 西田 智男

1 はじめに

本校には不登校や登校渋りの児童の割合が全国平均より高いといった実態がありました。調査結果より将来や対人関係への不安感、学級・学校での孤独感、学習への無気力感を感じている児童が多くいることが分かりました。そのような不安感・孤独感・無気力感をどのように軽減させていくかが最大の課題となっていました。そのような中、児童の中でも体育の学習を好む児童が多く、体育の学習を通して何か支援の場として設定できないか、その可能性を探る研究にしたいと考えました。

2 研究の内容

児童の不安感等を和らげるためのキーワードを「安心」としました。児童にとっては、「できた！分かった！やってみてよかった。失敗しても大丈夫」と思えること、「先生や友達、家の人に認められた。最後までやり通せた」と思えること。「自分にも役割、居場所がある」と実感できることが必要であると考えました。

この「安心」という言葉こそが本校の研究を進めるうえで重要なキーワードになっています。この研究主題を実現させるために①児童が安心して学び合うための手立て②児童が自ら学びを深めるための手だてについて、各分科会で提案し、研究を進めることにしました。

3 研究の実際

【保健分科会】日常生活の中で学びを実践的に生かそうとする意識の育成を目指しました。

①児童が安心して学び合うための手立て

- ・ 学びをつなぐグループ活動（認め合い）
- ・ 仲間と見付ける課題づくり（協働）

②児童が自ら学びを深めるための手だて

- ・ 専門的な知識と体験で深まる学び（専門家の招聘）
- ・ 自分を見つめ、仲間から学ぶ（他者理解）

【体育分科会】話し合いの時間を大切に、児童同士の交流を深めることで学びに向かう力や人間性等をよりよく育むことをめざしました。

①児童が安心して学び合うための手立て

- ・ 児童同士の関係づくりと学びの支援（励まし）
- ・ ゲームにつながる運動遊び（協働）
- ・ 安心して話し合うことができる関係づくり（他者尊重）

②児童が自ら学びを深めるための手だて

- ・ 心と技をつなぐスピリット・サークル（認め合い）
- ・ 見て気付き、「いいね！」で深まる工夫（賞賛・自己肯定感）
- ・ 作戦カードから学びのサイクルへ（協働・学びの深まり）

【食育分科会】「令和4年度 小学校学習指導要領実施状況調査結果」から、特別活動の「ウ 自己実現」において、全児童の約15%～19%が「めあてをもてていない」ことが明らかとなった。そこで、児童がめあてをもてるようにすることを目指しました。

①児童が安心して学び合うための手立て

- ・ 一人一役で広がる学びのかたち（他者尊重）
- ・ 個の学びから共有へ（他者理解）

②児童が自ら学びを深めるための手だて

- ・ ICT×交流で深まる主体的な学び（他者理解と主体的な学び）

【その他の取組】

○化成たいそう

本校の卒業生である志村けんさんの「ヒゲダンス」をモチーフにオリジナル体操を授業前に取り入れています。



右足からボックスステップ

○始業前の朝遊び

始業前、朝一番に体を動かすことで一日の学習に集中して取り組むことができます。

○なわとびシーズン ○化成マラソン

運動の日常化を目指し自ら進んで体を動かすことを大切にしました。教員も一緒に参加します。

4 成果と課題

【成果】

- ・ 安心できる学習環境を保証することで、児童同士の活発な声掛け、学習中に助け合う場面など互いに学び合おうとする姿が多く見られるようになりました。
- ・ 健康や食に関する知識・理解が深まり、日常生活で活用する姿が見られるようになりました。
- ・ 体育授業の基礎基本や指導内容を明確にすることで体育授業に関する教員の授業改善への意識が高まりました。

【課題】

- ・ 児童同士の学び合いの中で、課題を設定し課題を解決しようとする自己調整能力を育成していく必要があります。

令和6・7年度 日野市教育委員会研究奨励校

研究主題 「地域をステージに探究する児童の育成」

～互いに学び合う活動を通して～

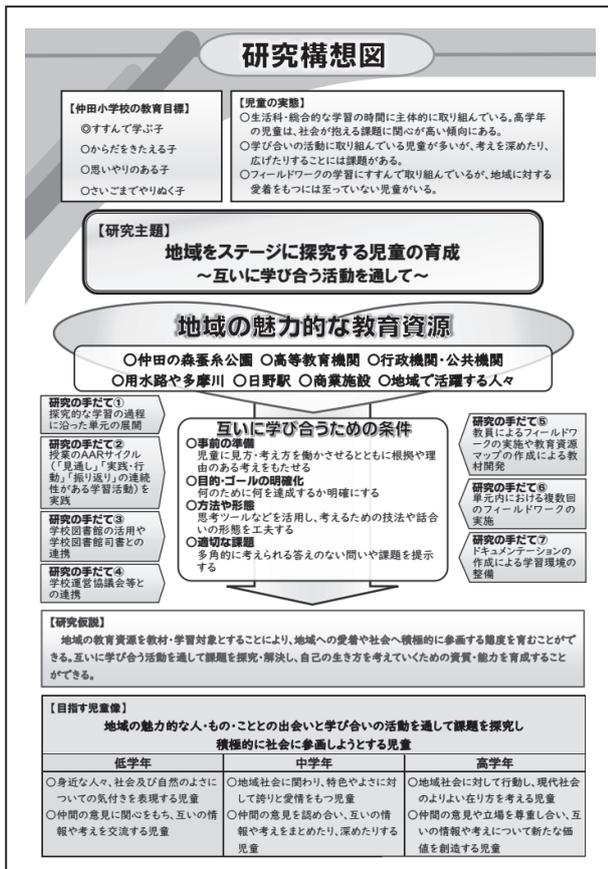
令和7年11月10日発表

日野市立仲田小学校 校長 山本 剛秀

はじめに

本校の児童は、主体的な態度で学習し、すすんで課題を立てたり、見直しをもって計画的に取り組んだりすることに課題がありました。また、地域の特色について意欲的に学んでいるが、自分の考えをもつことには課題がありました。そこで、地域にある魅力ある教育資源を活用して、児童の主体的・探究的な学びを深めようと研究をスタートさせました。

研究の内容



※手だて③について

各学年の探究課題に関連する書籍を集め、ブースを設けました。学校図書館司書は、日頃の学習に協力したり、校内研究の協議にも参加したりしました。

※手だて⑦について

ドキュメンテーションとは、児童が学習に取り組む様子の写真を教室等に掲示し、吹き出し等にもそのときに感じたことや考えたことを付け加え、学習内容を整理させる掲示物です。全学級が1年間を通して、教室や廊下に掲示しました。

成果と課題

【成果】

- ・児童意識調査の全ての項目において、平均値が向上し、「地域への愛着」と「社会への参画」は有意に向上しました。
- ・主体的に取り組もうとする姿が見られました。また、学び合う学習場面において、考えを深め、自立的に学習を進める姿が見られました。
- ・児童が、生活科・総合的な学習の時間における見方・考え方を働かせることで、地域の身近な事物のよさや課題を見だし、自らの考えを深める姿が見られました。

【課題】

- ・フィールドワークの内容が多様化したため、時間と人手の確保が課題です。解決の手だてを考えていく必要があります。
- ・各学年で実施した学び合う活動の具体例を共有しきれていませんでした。今後は、教育活動全体を通して、学び合う活動の具体例を蓄積していきます。

おわりに

生活科及び総合的な学習の時間を中心に試行錯誤しながら研究に取り組んできました。この2年間の探究的な学びを通して、児童は地域の様々な方々と出会い、交流し、感じ、考え、地域と結び付きながら学びを深めてきました。そして、地域の素晴らしさを学び、学び合いを通して更に学びを深めていきました。この2年間の研究の成果と課題を明確にし、今後も研究を深めていく所存です。

「何でも屋」から「組織のデザイナー」へ

墨田区立両国小学校 副校長 手山 晃 洋

副校長という職は、その守備範囲の広さゆえに「やりがいが見えにくい」と語られることがあります。昇任直後の私も、押し寄せるメールと書類の山に「自分は何でも屋なのだろうか」と自問自答していました。しかし、今、私は確信しています。副校長とは、学校運営の根幹を支え、組織をデザインし、教育の可能性を大きく広げていく、極めてやりがいのある職であるということ。

学校は、ボトムアップとトップダウンが適切に機能してこそ力を発揮する組織です。日々の相談対応や休暇制度の周知、文書決裁といった業務は、単なる事務手続きではありません。教職員一人一人の安心感を育み、挑戦しやすい環境を整えるための大切な対話の場です。副校長が良き理解者として寄り添い環境を整えることは、巡り巡って児童の笑顔へとつながります。

副校長の視界は校内だけにとどまりません。保護者や地域、教育委員会、他校、外部団体との連携を通して、私たちは学校と社会をつなぐ通訳者としての役割を担います。特に行政との協働は、制度を味方につけながら、学校

改善を加速させる醍醐味に満ちています。地域全体の教育力を高めるこの広域的な視点は、副校長だからこそ得られる価値です。

副校長の仕事は確かに多忙ですが、ICT機器の活用やチームの役割分担の再設計によって、本来注力すべき「教職員の成長」と「組織の変革」に時間を生み出すことが可能です。受け身になるのではなく、主体的に仕掛けていくことで、学校の姿は確実に変わっていきます。やりがいは与えられるものではなく、自ら創り出すものなのです。

副校長は決して「管理事務の番人」ではありません。校長と役割を補完し合い、それぞれの強みを掛け合わせることで、学校を前へ進める最強のエンジンとなる存在です。

最後に。副校長が眉間にしわを寄せていては、学校の未来は明るくなりません。誰よりも楽しみ、軽やかに、そして大胆に挑戦する。その背中を示すことこそ、私たちの務めだと考えています。

「副校長が変われば、学校は変わる」

教育理念を具現化する学校経営 — 副校長としての使命 —

武蔵野市立第五小学校 副校長 水崎 一 誠

第四期武蔵野市学校教育計画の教育理念「自他の幸せと豊かな社会を実現する未来の創り手を育む」は、子どもたちが自らの夢を追求するだけでなく、他者と支え合いながら社会をよりよくしていく存在へと成長することを目指している。この理念を教育活動として具現化している一つが武蔵野市民科の取組であり、本校の校内研究テーマ「夢をかなえる」とも強く結び付いている。

本校では、総合的な学習の時間を中心に、地域を財とした新たな教材開発が進んでいる。三年生の地域に残る戦争跡を通して平和の尊さを考える学習は、「自他の幸せ」の根幹に迫る実践である。また、四年生の玉川上水を題材とした探究学習では、地域社会を支える人々の思いや行動に触れ、豊かな社会の創り手としての視点を育んでいる。さらに、地域コーディネーターによる地域人材の紹介は、学びを社会へと開く重要な役割を果たしている。

五年生で行う武蔵野市特有の長期宿泊体験であるセカンドスクールの取組も、市民科と深く関連している。自然体験や集団生活を通して培われる主体

性や協働性は、理念の体現そのものである。六年生は子どもたちが学校行事の企画・運営に関わる。これまでの経験を基に、全員で学校行事を創り上げる活動は、「夢をかなえる」具体的な実践の場となっている。

こうした取組を持続的・発展的に推進する上で、副校長の役割は極めて大きい。第一に、教育理念と校内研究、日々の教育活動を一本の軸で結び、学校経営として明確に位置付けることである。教育課程編成や学校評価、分掌

組織の動きと関連付けながら方向性を示す。第二に、教職員の挑戦を支える環境づくりである。若手教員が研究を楽しみ、自由に発想し実践できるように心理的安全性を確保する。そして、一方で中堅・ベテラン教員の経験と知見を生かし、組織的な支援体制を整える。

私は、副校長して理念を語るだけでなく、具体的な実践へと落とし込み、教職員一人一人の力を結集させるマネジメントを行いたいと考える。そして、子どもたちが自他の幸せを願い、豊かな社会を創る未来の創り手へと育つよう、学校全体を支え続ける存在でありたい。

児童とともに学びを創る教員を目指して

渋谷区立神南小学校 栗原彩乃

教員五年目を迎え、児童の考えや思いを丁寧に受け止めることが、学びを深める出発点であると日々実感しています。授業づくりや学級づくりでは事前の計画を大切にしながらも、児童の発言や表情、つぶやきから学びの広がりをつまみ、その場にに応じて指導を工夫することを心掛けています。

学生時代の教育実習では、授業の流れを細かく準備し、想定されるやり取りをもとに指導を組み立てていました。しかし、実際には、予想と異なる反応も多く、その都度計画に戻そうとする意識が働いていました。この経験から、児童の反応を受け止め、その場で問いや活動を調整する柔軟さこそが、授業を生きた学びにすることと学びました。

渋谷区で勤務する中で、三年目までは難聴言語の通級指導学級を担当しました。一対一の指導では、児童の困り感や強みを丁寧に捉え、明確な目標の下、手だてを考え、振り返りを通して成長を確かめていきます。教科書によらず学習計画を立てる経験を重ねる中で、わずかな変化を見取り、安心して対話できる関係を築く大切さを学びました。

この視点は、通常の学級で多様な児童を支える土台となっています。現在は通常の学級の担任として、渋谷区独自の「シブヤ未来科」に取り組んでいます。地域や社会の課題を手がかりに調べ、考え、発信し、行動につなげていく探究的な学びです。福祉をテーマに学ぶ中で、児童は「学んだことを社会に伝えたい」という願いをもち、話し合いを重ね、デザインを生かしたクッキー販売に挑戦しました。その際、私は答えを示さず、目的の共有や深まりを促す問いかけ、役割の見直しを通して、児童が自分たちで決められる場を整えることを大切にしました。行き詰まったときには「何を困っているのか」「どうすれば前に進めるか」を一緒に整理し、次の一手を考える振り返りを位置付けました。試行錯誤を重ねてやり切った経験は、児童の達成感と自信につながり、保護者や地域の方々からの温かな声も学びを後押ししました。児童の声の奥にある思いや願いに寄り添い、学びの道筋をともに考えていく教員でありたいと考えています。これからも日々の実践を振り返り、子どもが安心して挑戦できる学級・授業づくりを続けていきたいと思っています。

かけがえのない小学校生活をともに

小金井市立本町小学校 橋本侑佳

私は、A類保健体育選修を卒業し、小学校教諭として五年生の担任と、学年の体育を担当しています。自分のやりたい体育授業を追求できる喜びと、その難しさを感じながら、子どもたちと学び合う日々を過ごしています。

今のように子どもたちと向き合う自分の姿は、幼い頃から思い描いていた将来像ではありませんでした。小学校の頃、学級が落ち着かず、学習に集中できない経験をしました。先生方の想いや願いと、それを受け入れられない友達の想いの両方を自然と感じ取っていました。当時、「自分だったらどう関わるだろうか」と考えていたことを今でも覚えています。

中学、高校へと進学し、多くの先生方と出会いました。改めて小学校生活を思い返すと、子どものことを第一に考え、最後まで向き合い続ける先生方のすごさに気付きました。いつからか、「私も子どもたち一人一人と向き合える存在になりたい」という想いが強くなり、教育学部への進学を決めました。大学時代には、校種の異なる教育実習を通して、発達段階に応じた学びの在り方や関わり方について学びました。

その中でも、日常生活の中で子どもの小さな成長に寄り添い、学びの基礎づくりに深く関わる事ができる小学校の現場に大きな魅力を感じました。

そして現在、周りの先生方に支えていただきながら、三年目を迎えようとしています。一人一人の先生がそれぞれの思いを胸に、子どもたちと真剣に向き合う姿から、日々多くのことを学んでいます。そうした先生方の姿は、私にとって憧れであり、目指したい教師像です。このような環境の中で、子どもたちと向き合えることに感謝し、歩みを重ねていきたいと考えています。

小学校時代、先生方の想いと友達の想いとの間で葛藤していた時期もありましたが、大好きな人たちと過ごせた時間そのものが今の自分を形づくっています。だからこそ、子どもたち一人一人が納得感や満足感を得られる関わりをし、「今日も楽しかった」「明日もまた来たい」と素直に感じられる環境を大切にしていきたいです。そして、目の前の子どもたちの声に耳を傾けながら、その想いを受け止め、寄り添っていける教員を目指していきたいと考えています。

本部だより

令和八年新年祝賀会

大いに盛り上がる

総務部長 佐野 篤

令和八年一月二十五日(日)正午より、東京ガーデンパレス(高千穂の間)にて、新年祝賀会を盛大に開催することができました。当日は東京学芸大学学長 國分充様にご祝辞を頂戴する予定でしたが、体調を崩された為、副学長 佐々木幸寿様(次期学長)にご祝辞を代読していただきました。

今年の出席者は総勢百四十名となり、年々参加者が増えております。今年から、校長・副校長等に昇任した方や各種選考に合格した方の紹介を復活しました。また、お楽しみ表彰については、参加人数の多い支部の表彰はもちろんのこと、参加費振込の早かった個人を表彰しました。また、管理職以外の参加が多かった支部の表彰を行いました。来年は更に多くの会員の皆様の参加をお待ちしております。

恒例の記念撮影については、「〇〇支部に所縁(ゆかり)がある人」との呼びかけに、壇上で多くのつながりを確認することができ、笑顔の溢れる記念撮影となりました。来年はどんな所縁の撮影が生まれるか、今から楽しみです。

さて、令和九年新年祝賀会は一月三十一日(日)に、東京ガーデンパレスで開催予定です。東京学芸大学のつながりを大切に、今から各支部で同窓生を誘ってください。よろしくお願いたします。

今年度の会費納入について

会計部長 關口 泰正

日頃より、会計部の活動に御協力いただき、ありがとうございます。

今年度も、各支部で集まる機会があり、楽しい時間を過ごすことができました。うれしいお話を伺っております。

各支部長の皆様をはじめ会員の皆様には、今年度の会費納入に御協力をいただき誠にありがとうございました。

それぞれの支部で、声をかけていただき、工夫して会費を徴収していただいていることに感謝申し上げます。

今年度も、一月三十一日現在で、二千二百八十名の正会員の皆様に会費を納入していただきました。また、七百十七名の管理職の皆様には、賛助会費を納入していただきました。昨年度よりも多い数字です。

今年度も、年度末の決算を迎えます。皆様から納入していただいた会費等の収支をしっかりとまとめ、決算報告をいたします。

皆様の会費が充実した研修会や講演会の活動につながります。来年度も、皆様の御協力をお願いいたします。

会計部では、今後とも、同窓会の予算管理を徹底させ、会計面から同窓会の活動を支えてまいります。

「獅子第47集」配本の依頼

研修部長 西田 香

学校経営研修テキスト「獅子第47集」が完成いたしました。毎年、研修部が内容を修正し、国や東京都の施策、教育課題、法律など、最新情報の掲載に努めています。内容の重複をなくして軽量化を図り、持ち運びやすくいたしました。学校運営を支える校長先生方から若手まで、幅広くご利用いただけるものと自負しております。

価格も、同窓会本部と「教育出版」のご支援を得て、二千五百円の据え置きです。三月二十四日を目途に、各支部へお届けいたします。

次年度の研修会予定

【論文研修会】

◆五月十六日(土)

◆五月三十日(土)

・受付 十四時三十分～四十分

【面接研修会】

◆九月六日(日)

・受付 九時～九時十分

【主任教諭選考(論文研修会)】

◆令和九年二月六日(土)

・受付 十四時四十分～五十分

*会場は、新宿区立市谷小学校の予定です。同窓会HPでご確認ください。

*各研修の申込は、「獅子」表紙裏の

申込QRコードから

研修の前日までに

お願いいたします。



次年度の管理職等名簿の準備について

調査部長 藤山 由仁

皆様のご協力のおかげをもちまして、昨年十月に「令和七年度管理職等名簿」が完成し、学芸大学同窓会ホームページ上にPDFで掲載することができました。いつも調査部に大きなご協力をくださり、心より感謝申し上げます。

今後の作業ですが、三月に、現在の各支部長の皆様に、来年度の新支部長と名簿担当の先生が誰になるかというものの調査依頼を行う予定です。Google formにて調査をする予定ですので、必ず返送していただきますようお願い申し上げます。

そして四月から令和八年度の「管理職等名簿」を作成、修正を進めていきたいと考えております。こちらから令和七年度の名簿を送付しますので、それを訂正していただければと思います。新支部長への引き継ぎも含めて、どうぞよろしくお願いいたします。

毎年支部長の返信が無い、名簿の返信が無いなどの支部がございますので、円滑な名簿作成に向けて御協力をお願いいたします。

また、誠に申し上げにくいのですが、昭和二十八年以前卒業の皆様は、ご高齢で物故者やご逝去、ご不明の方もおられます。「その他」の欄にご逝去の年を記載し、次の年にはお名前を名簿から割愛していく作業が必要となります。

終身会員の登録の仕方は、希望者が支部長から申込書を受取り、ご自分で手続きをする流れになります。終身会員を希望される方は所属支部に連絡を取りご相談ください。

新年祝賀会写真集

